

翻
訳

Charlotte M. Brane 著 『ドラ・ソーン(Dora Thorne)』(翻訳・その26)

堀 啓子

これまで『東海大学紀要 文学部』に連載してきた本稿は、『東海大学紀要 文化社会学部』に稿を移し、引き続き、『ドラ・ソーン(Dora Thorne)』の翻訳を掲げる。原著は長編物語であるため、分載二十九回目となるこのたびは、第三十五章および第三十六章の訳を掲げることにする。猶、原著も引き続き Dodo Press の二〇一〇年リプリント版に拠るものとした。

*本稿は、科学研究費補助金【基盤研究(C)】「課題番号：24K0367021」による研究成果の一部である。

三十六章

ヒュー・ファアーナリーはリアンから手紙を受け取ると、失意に満ちた呪いの言葉をつぶやきながら読んでいった。何時間も厚い雲に覆われていた月が、もがきながら顔を出し、かすかな光をのぞかせた時だった。そしてリアンはその光によって、この長身の男の、

暑い気候の太陽のせいで日焼けした浅黒いハンサムな顔と思いつめた悲しそうな瞳、固く結ばれた唇を透かし見ることができた。彼は彼女が見慣れてきたような紳士ではなかった。だが彼は礼儀正しく丁寧で、彼女の名前を尋ねたときに脱いだ帽子を、話をしている間ずっと被らなかつた。

「待て、とは！」と彼は叫んだ。「ああ私はまだ待たなくてはならないのか？彼女に会うことを切望して待ち続けねばならない間に私の人生はすっかり消耗してしまうのだ、とお姉さんに伝えてください。」

「姉は実際に体調が悪いのです。」と、リアンは答えた。「私は不安に思っています。姉が不安と恐れで体調をくずしているとお話したからといって、私に怒らないでください。」

「彼女は言い訳をするためにあなたをここに寄越したのですか？」

と彼は唸るように尋ねた。「それは全く無駄なことです。あなたのお姉さんは、約束された私の妻です。ミス・リリアン、ですから私は彼女に会います。」

「少なくとも姉が喜んでそうしたいと言うまでは待つていただかなくては」とリリアンは、ヒュー・ファーンリーの顔をじっと見つめながら言い、その落ち着いた威厳に満ちた態度は言葉以上の効果を彼に及ぼした。

彼の顔は悪人のものではない、と彼女は思った。残忍さや卑しさはみいだせなかった。ただその顔に浮かぶ強く激しい愛情が彼女を驚かせた。彼は、悪意や強情から姉の人生を破壊させてしまうような人物には見えなかった。彼の顔を眺めていた彼女には希望が生まれた。彼女はベアトリスのために彼に嘆願しようと決意し、あの子供じみた愚かな約束——子供っぽい過ちを忘れてくれと頼んだ。

「姉はとても不幸せなのです。」と彼女は勇敢に切り出した。「そしてこの不幸にもはや耐えられないように思います。不幸のあまり、死ぬか気が狂ってしまいそうなのです。」

「私も死んでしまいそうなのだ。」と彼は割って入った。

「あなたは残酷な人には見えませんか、ミスター・ファーンリー」とリリアンは続けた。「あなたの顔には善意と真実味があり——私はあなたを信頼します。あの約束をあなたと交わした時、姉はただ愚

かで性急な子供に過ぎなかったのです。約束を守ろうとすれば彼女の全人生は破綻してしまうでしょう。どうぞ寛大になって姉を解放してください。」

「お姉さんがあなたにそれを頼んだのですか？」と彼は問いただした。

「いいえ」と彼女は答えた。「ですが姉がその約束を守るためにどんな犠牲を払うことになるかお分かりですか？アール卿は決して彼女を許さないでしょう。姉は、家や姉妹や友達や、彼女が愛する、そして大切に思う全てのものから切り離されてしまうのです。こんな状況に陥らせたとしたら、姉があなたを好きになることができると思われるか、考えてもみて下さい。」

「どうしようもない。」と彼は憂鬱そうに言った。「彼女は私の妻になると約束したのです、ミス・リリアン——私が真実を語っていることは神がご存知です——そして私は彼女の言葉を頼りに生きてきたのです。あなたは真の男の強い愛がどのようなものかご存知ではない。たとえ彼女がその小さな足で私を踏みつけようとも、そして私の人生を踏みにじってしまおうとも、彼女を拒めないほど私は彼女を愛している。私は彼女に会わねばならない——私の心に満ちた、彼女に恋焦がれて渴望する愛を満たすために。」彼の目に涙がいつばいに浮かび、激しい嗚咽で彼の力強い体は震えた。

「私は彼女を傷つけたりはしない。」と彼は言った。「ただ彼女に

会わねばならない。かつてたった一度——あの美しい誇り高い顔は私の胸にもたれたのだ。どんな母親でも私が彼女に会いたいと思つて以上には我が子に会いたいとは思わないだろう。彼女にここに来てもらつてください、ミス・リリアン。かつてそうしたように彼女の足元に跪かせてください。もし彼女が私を遠ざけようとするのならば、私は死ぬしかありません。ですが彼女にはできないはずです。私ほどの愛情を遠ざけようとする事ができるような女性など、この世にはおりません。あなたには理解できないでしょう。」と、彼は続けた。「彼女に最後に会つてから二年以上が経ちます。日夜、彼女の顔は私の目の前に浮かんでいました。私はこの愛にすがつて生きてきたのです。そしてそれは私の人生——私の全てです。自分の心を体から引き裂いて生きることがかなわない以上に、私の胸から彼女の面影を追いやることはできないのです。」

「もし姉があなたを好きだったとしても」とリリアンは優しく言つた——というのも彼の情熱的な言葉が彼女の心を打つたからだつた——「アール卿がそんな約束を姉に守らせるようなことは決してないとお分かりいただかなくてはなりません。」

「この約束が交わされた時、彼女はアール卿について何もご存知ありませんでした。」と、彼は答えた。「そして私も知りませんでした。彼女は檻に閉じ込められた鳥のように、悲しみにしおれた美しい子供だったので。私は彼女に自由と解放を約束しました。彼女は私に愛を誓いました。その時アール卿はどこにいらしたのでしょう？彼女は私と一緒にいて安全でした。私は彼女を愛していました。」

私は彼女の実の父親よりもずっと優しく、彼女を大切にしています。だが——彼はそうではありませんでした。」

「今では違いますわ」と、リリアンは言った。

「だが私は変わることはできない。」と彼は答えた。「もしも何かの幸運で私が国王になったとしても、あなたのお姉さんへの愛が薄れることはない！男の心は弄ぶものだろうか？私は我が恋人を取り戻せないのだろうか？こんなにも辛く苦しんでいるのに。」

リリアンは、この強い愛情の前で何を言つたらいいのか分からなかった。慰めようという彼女の優しい努力は無駄に終わった。彼女は彼を哀れに思い、同時にベアトリスを哀れに思つた。

「あなたは寛大な方だと思つていますわ。」しばらくたつて彼女は沈黙を破つた。「偉大な、誠の、高貴な愛情は決して自分勝手なものではないのです。私の姉はあなたと一緒にいては決して幸せにはなれません。ですから彼女を解放してください。もしあなたが彼女に強要すれば、正確には彼女にこの無分別な約束に従うことを強要すれば、彼女はどんなにあなたを嫌うことを思つてみて下さい。もしあなたが寛大にも彼女を解放してくだされば彼女がどんなにかあなたを尊敬するか思つてみてください。」

「彼女は私を愛してはいないのか？」と彼は尋ねた。その声は苦しみのあまりしやがれていた。

「そうです。」とリリアンは穏やかに答えた。「真実を知る方が良いでしょう。彼女はあなたを愛していないし、今後も決して愛することはありません。」

「私は信じない。」と彼は叫んだ。「彼女自身の口から告げられなければ私は決して信じることはない！私を愛していないだと！ああ、神よ！あなたが話しているのは私の妻になると約束したあの女性のことなのだご存じなのか？もし彼女自身が私にそういうのなら、私はそれを信じるだろう。」

「姉はあなたにそう話すでしょう。」と、リリアンは言った。「そしてあなたは彼女を責めてはなりません。彼女が元気になった時にまたいらしてください。」

「いや。」と、ヒュー・ファナーナリーは応じた。「私は充分過ぎるほど待った。私は彼女に会うためにここに来た。そして彼女自身が私に話をするまでここを離れないと誓っているのだ。」

彼はポケットから小さな鉛筆の箱を取り出し、ベアトリスが書いてきた封筒の上に数行の走り書きをした。

「これをあなたのお姉さんに。」と彼は優しく言った。「そして、ミス・リリアン、あなたがここにいらしてくださいだったことに感謝します。あなたはとても親切で優しくかった。あなたの表情には誠意と

実意がある。決して男の心を弄んで傷つけたりしないでください。さもなければあなたの手には余る強い日の光にさらされ続けることになるでしょう。」

「何かあなたの慰めになることを申し上げられたら良かったのですが」と彼女は言った。彼は手を差し伸べ、彼女はその握手を拒むことはできなかった。

「さようなら、ミス・リリアン！思いやり深いあなたに、神のご加護を。」

「さようなら。」と二度と会いたくないと思うこの情熱的な浅黒い顔を眺めながら彼女は答えた。

月は厚い雲の影に隠れた。ヒュー・ファナーナリーは小道を足早に立ち去った。リリアンは折りたたんだ紙片を持って庭を急いで横切った。ただ二人とも、まっすぐに立った背の高い人影にも、その青ざめた厳しい表情にも気づくことはなかった。そして二人とも、リリアンの金髪からショールがすべり落ちた時の、ライオネル・ダッカーの低いうなり声を聴くことはなかった。

「どこへ行くのです？」とベアトリスは、彼がピアノの上に楽譜を置いた時に尋ねていた。

「葉巻を探しにです」と彼は答えた。「エアリーもあなたも礼儀正

しく振舞おうとしなくていいですよ、もう。そして自分たちと一緒にいてほしいとおっしゃる必要もないのです。」彼は居間を立ち去って、葉巻の箱が置いてある自室へと向かった。彼はその一本を選び取り、それを吸うために庭へ出た。いったい何の因果で、彼は植え込みのそばの小道へと導かれたのだろうか？風は背の高い木々の枝を揺さぶっていたが、その風がふと止んだ時、彼はささやき声を耳にした。植え込みの上から覗き込んだ彼は長身の男と、黒いシヨールにくるまっっている若い女性の華奢な姿を目にした。

「メイドとその恋人だろう。」とライオネルは独り言を言った。「アール卿が好むような類のことではないだろうが、自分には関係ないことだ。」

しかし男の声が彼の耳を打った——その声は真の情熱に満ちた重々しいものだった。この男は誰だろうと彼は訝しんだ。彼は、その若い娘が彼の手に一瞬自分の手を重ねてから、急ぎ立ち去つたのを見た。

黒いシヨールがすべり落ちて、かすかな月の光にリリアン・アールの美しい顔立ちと金髪が透かし見えた時、彼は自分の気が狂うのではないかと思つた。

リリアンが再び居間に戻つた時、美しいオルムル（主に十八世紀から十九世紀の
アンティーク家具や時計表

飾品に見られるもので、金メッキを施した真鍮または青銅（ブロンズ）のこと。見た目は純金のように輝き、装飾性が高い。の時計が九時半を告げていた。チエスと、カードゲームのテーブルは彼女が部屋を出た時のままの様子だった。ベアトリスとエアリー卿はまだピアノの前にいた。ライオネルは姿が見えなかった。彼女はベアトリスの傍に寄り、エアリー卿に、姉を五分ほど連れ出しても構わないかとこやかにと尋ねた。

「十分でも良いですよ、お望みならば」と彼は答えた。「ですがそれ以上はなりませんよ。」そこで二人の姉妹はこの長い居間を横切つて、小さな私室にはいった。

「早く、リリアン。」とベアトリスは叫んだ。「あなたは彼に会つたの？彼は何て？」

「会つたわ。」と彼女は答えた。「彼が話したことをすべて伝えるには今は時間がないわ。彼からこのメモを預かってきたわ。」そしてリリアンは姉の手に折り畳んだ紙を渡して、その両手を握りしめた。

「ねえベアトリス、あなたがそれを読む前に言わせてね。」と彼女は言った。「彼の心が和らぐように私は努めたわ。そしてあなた自身で彼に会つて、自由にしてくれと頼んだならば無駄にはならないと思わわ。」

その美しい顔立ちに太陽のようにまぶしい光が差した。

「ああ、リリー。」と彼女は叫んだ。「それは本当？ 誤った希望を持たせてからかわないで。私の人生はこのバランスの上で震えているの。」

「彼は残酷な人ではないわ。」とリリアンは言った。「私は彼を気の毒に思うわ。もしあなたが彼に会えば彼はあなたを解放すると思うわ。彼が何と言っているか見てごらんさい。」

ベアトリスはその手紙を開いた。鉛筆書きの、わずか数行のメモで、彼女はリリアンに読んでもらおうとはしなかった。

「ベアトリス」とヒュー・フアーナリーは書いていた。「あなたは私を愛してはいないと自分自身で私に告げなくてはならない。あなた自身が私に見せた甘い希望の全ては、不誠実な嘘だったとあなた自身が私に言わねばならない。私はあなたに会わずにアールズコートを去ることはない。木曜日の夜十時に、私は同じ場所に来る——自由になりたいのならば、私に会って話しなさい。ヒュー。」

「私の勝ちだわ！」と彼女は叫んだ「リリー、私の手を握って——幸せで震えているわ。ねえ、私はこの紙を持っていられないわ。彼は私を解放してくれる、そして私は恋人を失わずに済む——私にとって全てである恋人を。あなたに何と言って感謝したら良いのかしら？ 今日火曜日ね。どうやって木曜日まで過ごしたらいいかしら？ 言葉では言い尽くせないような積荷というか重荷、お荷物が取り除かれて行くような気がするの、リリー。私はエアリー卿の妻に

なるわ。あなたが私のことを救ってくれることになったから。」

「ベアトリス。」と、この姉妹たちが戻ってきてきてチェステーブルの脇を通り過ぎた時に、アール卿は声をかけた。「我々のゲームは終わった。何か歌ってくれないだろうか？」

美しい彼女の声が、これほどまでに楽しげに響き、この美貌が、こんなにも輝いていたことはなかった。何か勝利の雰囲気を感じたような歌い方で——底流を流れる悲しみがそのすばらしい美しさを損なうことはなかった。エアリー卿はうっとりして、彼女の椅子のほうに身をかがめていた。

「あなたの歌はまるで啓示でも受けたかのようだ。」と彼は言った。「私は、あなたのことを考えていました。」と彼女は答えた。そして、その夢見るような激しい情熱の表情が、彼女の言葉の真意を伝えていることを、彼は悟った。

ほどなく、カードゲーム中のちよつとした言い争いで、レディー・ヘレナが助けを求めてエアリー卿を呼びよせた。そしてベアトリスは無意識に鍵盤をかき鳴らしながら、一つの結論に達した。彼女はヒューに会うことにした。それは避けることができない。できる限り勇敢に、彼に出会おう。結局のところ、リリアンが言った通り、彼は残酷ではないが、ただ彼女を愛してはいたのだ。彼がどんなに深く彼女を愛しているかを思って、彼女の誇り高い唇は、勝ち誇っ

たような冷笑でゆがんだ。彼の愛情に訴えかけて自分を解放してくれるように、と嘆願するのだ。

三十七章

彼が拒むことができないほど一生懸命、彼に嘆願しよう。誰に彼女を拒むことができようか？風が木々の葉を揺らすかのように、彼女が男たちの心を動かさないことがあるだろうか？彼は、最初は怒るだろう、おそらくは強く、激しく。だが、ついには彼女が勝利するだろう。そこに座ったまま、夢見るような優しい旋律があたかも彼女の指を奪いとっているかのように、彼女は、この一連の情景を想像していた。眠れる森がどれほど静かなのか——そして夜のしじまがどれほど深く深いのか、彼女は知っていた。気の毒なヒュー！幸福のあまり、彼女は彼を今までもよりも優しい気持ちで思いやった。

彼女は彼に元気でいてほしかった。彼は、彼と同じ階級の優しい娘と結婚することになるだろうし、将来性のある、幸せな男になるだろう。そしてもしも彼が、彼女から離れていつてくれるならば、彼女は彼の良い友達にもなれるだろう。彼女の秘密は、誰も知ることはない。リリアンは誠実にこの秘密を守ってくれるだろう。そして、素晴らしい年月を経た後に、彼女はエアリー卿の最愛の妻として、若き日の過ちが、修復され、忘れられていたことに気づくだろう。

この空想はとても楽しく、彼女の歌声は、より勝利に満ちて響いたのは不思議ではなかった。この夜、彼女の歌声を聴いた人々は、決してこの声を忘れることはなかった。

ライオネル・ダッカーは、シヨックと驚愕でしばらく立ちすくんだまま動けなかった。彼が間違えるはずはなかった。彼自身の感覚が、彼を不適切にもてあそんだのでなければ、恋人と逢引きをしているメイドだと彼が見誤っていたあの娘は、リリアン・アールだった。あれほどまでに純粹で純真だと彼が信じていた彼女が、夜の暗闇と静寂にまぎれて父親の家から抜けだして、その父親の屋敷内で、日の光のもとでは会えない人物に会っていたのだ。

もしも、ライオネルの親友が誓って話したとしても、彼はそれを感じなかっただろう。だが己自身の感覚を彼は疑うことはできなかった。微かな弱々しい月光が、日の光の中で見たのと同じように、あの美しい顔立ちと金髪がリリアン・アールのものであると彼に確信させた。

彼は葉巻を投げ捨て、怒りのあまり歯ぎしりした。もしも、空が彼の足元に落ちてきたとしても、これほどまでに仰天はしなかっただろう。結局のところ、女性は皆同じだったのだ。彼女らは、真意も誠実さも持ち合わせてはいなかった。世の中は全て似たようなものだ。それでも彼は彼女を、あの純真で、純粹で、誠実で、世の全ての汚れに染まない自由さを絶対的に信じていた。あの美しい高麗な姿は、素晴らしい宝石を大切に隠し持っている、たった一つの美しい宝石箱のように、彼には思っていた。いや、のみならず、彼女

を知り、愛するにつれて、彼女の興味を惹く善良で純粋な全ての物ごとを、彼自身も好きになり始めていた。だが、全ては偽りで、忌むべきことだった。

この世に誠実なことなどないのだと、彼は独り言を言った。全ての女性たちの中で、最も純粋で美しいと彼が信じていたこの娘は、ただ他の女性たちよりもっと技巧に長けた裏切り者でしかなかった。彼の母親の小さな嘘や、隠していた卑屈な手段や、お金に汲々としていた境遇などは、リリアンの偽りに比べたら、大したことではなかった。

そして彼は彼女をそんなにも愛していた！あの、優しい瞳を覗き込んだ時、彼はその瞳の中に愛と真実が輝くのを見て信じていた。紅潮して彼に微笑みかけたあの愛しい顔は、あまりにも純粋で、純真に見えた。

彼女の小さな手を握り締め、清純で無垢な彼女の前で赤面し、あるいは彼女が彼を愛すると誓った時でさえ、彼女の唇に触れることなかったあの時から、どれぐらいの時が経ったことだろう。彼はどんなにか間抜けなお人好しだったのだろう。彼の何も見えていない間抜けぶりを、彼女はどんなにか笑いものにしていったことだろう。

あの男は誰だろう？彼女はかなり以前から知っていたに違いないのだ。アール卿の交流関係には、夜にまるで泥棒のようにその領地に侵入してくるような紳士などいない。どうしてあの男の後をつ

なかつたのだろう。そして彼の人生の最後の一インチまで、完膚なきまでに叩きのめさなかつたのだろうか？なぜ、あの男を行かせてしまったのだろうか？

彼は力強い両手をきつく握りしめた。ヒュー・ファアーナリーがその瞬間、ライオネルの力に捕われなかつたのは幸いだった。そして、この激しい強い怒りが消え去り、強い絶望が彼を捕えた。長く低い嗚咽が唇から漏れ、辛そうなすすり泣きが、彼の身体を揺さぶった。彼は、美しい純粋な恋人を失ったのだ。彼が崇拜していた偶像はうち砕かれた。偽りと欺瞞が、あの美しい姿に汚点を付けた。

苦しみの最初の痛みが続いている間、彼は館には戻らなかつた。彼は落ち着き、冷静さを取り戻すまで待つていた。そして彼は、彼女がどのように自分に会おうとするか、見ようとした。

彼の両手は震えていなかった。彼の心を駆け巡る強い怒りが、彼を冷静にした。彼は居間に戻っていった。そしてそのハンサムな顔が唇まで青ざめ、率直で親切な瞳に奇妙な怒りの炎が瞬いている以外は、ライオネル・ダッカーに何も変わつたところはなかつた。

彼女はそこにいて、彼が見せてくれるようにと頼んでいた大きなアルバムの上に身をかがめていた。金髪の頭は、その絵の上に俯いていた。彼が入って行くと、彼女は見上げた。その表情は落ち着いて、静かだった。その頬はかすかに紅潮し、明るい微笑みはその姿を揺らした。

「ここに絵がありますよ。」と彼女は言った。「ご覧になりますか？」

彼は、彼女に、自分のために歌ってほしいとどのように頼んでいたかを思い出し、彼女がその頼みを断り、しばらくの間、混乱しているように見えていたことを思い出した。今こそ彼はその理由を理解した。

彼は彼女の傍に座を占めた。この紙ばさみは大きな部屋のテーブルの上に置かれていて、銀のランプで照らされていた。彼らはあたかも、人々とは別々の部屋にいたかのように、二人だけだった。彼女は一枚の絵を取り出し、それを彼の前に置いた。彼は何も言わず、彼女が話すことも、聞いていなかった。

「リリアン。」と、彼は突然言った。「もし私が女性の犯す罪の中で最も恐ろしいものは何かと尋ねたらあなたは何と答えますか？」

「奇妙なご質問ですわね。」と、彼女は答えた。「わかりませんわ、ライオネル。私はすべての罪が嫌いですから。」

「それでは私がお伝えしましょう」と、彼は苦々しく言った。「それは嘘です。さもししい偽りです——嫌な、心無い裏切りです。」

彼女は、彼の怒った口調に驚いて顔を上げた。そして、しばらく沈黙が続いた。

「これらの絵を見ていることはできません。」と彼は言った。「片付けてください、リリアン・アール。目を上げて、私の目を見てください。私の顔をまっすぐに見てください。あなたに私の妻になってくださいと頼んでから、どれぐらいの時がたちましたか？」

彼女の優しい瞳は、決して揺らがなかった。半ば、驚いたように、その瞳は、彼の瞳にひたと当てられた。だがその質問には、かすかに紅潮していた彼女の頬の赤みが広がった。

「それほど前ではありませんわ。」と彼女は答えた。「数日前です。」

「あなたは私を愛しているとおっしゃいましたね。」と彼は続けた。

「そうですわ。」と彼女は答えた。

「では、もう一度、答えてください。あなたが私にそう答えていたように、あなたは誰か他の人を愛したり、好きになったりしたことはありましたか？」

「決してありません。」と彼女は静かに答えた。

「このようなご質問を許してください——他の、誰か別の恋人から、私よりも前に、こうした好意を受け取ったことはありませんか？」

「決してありませんわ。」と彼女はいつそう訝しみながら答えた。

「私はあなたの全ての愛情や信用や信頼を得ているのです。あなたは決して私を騙したり、裏切ったりしていません。あなたは私に対して、率直で誠実で正直でしたよね？」

「あなたは我を忘れていらつしやいますわ、ライオネル。」と、彼女は優しい威厳を以て言った。「そのような言葉遣いを、私に対してなさるべきではありません。」

「答えてください！」と彼は応じた。「あなたは失意に満ちた男と関わっているのです。あなたはわたしを裏切っていますか？」

「決して。」と彼女は答えた。「思いの中でも、言葉でも、行為でも。」

「ああ、慈悲深い神様」と彼は叫んだ。「人がこれほどまでに美しく、これほどまでに欺瞞に満ちていることなどあり得るでしょうか！」

彼を見上げた顔には、驚き以外の何も浮かんでいなかった。

「リリアン」と彼は言った。「私は、女性のもつ純粹さと高潔さの全ての理想像として、あなたを愛してきました。あなたの中に善良と高德の全てを見いだしてきたのです。私の信頼を激しく打ち砕い

てしまったあなたに、神がお許しを与えられますように。」

「私にはあなたが理解できませんわ。」と彼女はゆつくりと言った。「なぜあなたは私にそのようなおつしやり方をされるのです？」

「わかりやすく申し上げますよう。」と彼は答えた——「あなたが誤解なざることがないように。私は、あなたの婚約を交わした者として、あなたが愛して信頼していた男として、お尋ねします、リリアン・アール、あなたがこのお父様の領地の中で、今夜会っていた男は誰ですか？」

雷鳴がしばしば綺麗な梢を打ち砕くように、この質問が彼女を打ちのめしたことを彼は知った。彼女の唇から血の気が引き、鳩のような澄んだ瞳に雲がかかった。彼女は答えようとしたが、その言葉はかすかなつぶやきとなり、消えていった。

「あの場にいたことを否定されませんか？」と彼は尋ねた。「思い出してください、私はあなたを見ましたし、彼のことも目撃しました。あなたは否定されませんか？」

「いいえ。」と彼女は答えた。

「あの男は誰です？」と、彼は叫んだ。そして、彼女が恐れるほどの怒りの炎が彼の瞳を彩った。「教えてください。あの男は誰ですか？私は世界の果てまであの男を追いかけますよ。教えてください。」

「お答えすることはできません、ライオネル。」と彼女はささやいた。「私にはできません。お願いですから、私に秘密を守らせてください。」

「あなたは恐れることはありません。」と、彼は傲岸に言った。「私はアール卿にあなたのことを告げ口したりはしません。私がそうであったように、彼自身もあなたがどんな娘なのかご自身でお気付きになればよいのです。私自身の信頼のために、私は自分を呪うことはできません。彼は誰ですか？」

「私にはお話しすることはできません。」と彼女は口ごもった。そして、彼女が、白い小さな両手を苦しみのあまり握り締めていることに、彼は気づいた。「ああ、ライオネル。どうぞ、私を信じて——私に怒らないでください。」

彼女の苦しみを目の当たりにして、声の調子を和らげはしたが、「私に期待しないでください。」と、彼は言った。「あのような振る舞いを見て、話さずにはいられなかったのです。リアン。もしあなたが説明することができのなら、そうしてください。そしてもしあの男が、あなたの昔の恋人ならば、そのように話してください。もしあな、言い訳をしたり、説明をしたりすることができるといふような状況のものであったのならば、今それを話してください。」

「お話しすることはできません。」と彼女は言い、その美しい頭は、悲しげに彼の前でうなだれた。

「私が思っていた通りだ。」と、彼は苦々しく続けた。「あなたにはできないし、そうしないだろうと。あなたは代償をご存知だと思いますが。」

優しい瞳が、静かな悲しみを湛えた彼の目に向けられた。だが彼女は何も言わなかった。

「さあ、話してください。」と彼は言った。「あなたが邸を抜け出して出会っていた男のことを——なぜ、あなたは彼に会っていたのですか？率直に話してください。もし、この件がただの子供っぽい無意味なことであれば、私はいつかあなたを許せるかもしれません。もし、あなたが私に話すことを拒むならば、私はアールズコートを取り、あなたの偽りに満ちた美しい顔を二度、見ることはないでしょう。」

彼女は顔を両手にうずめた。そして、彼は、彼女の青ざめた唇からもれる、低い悲しみの、嗚咽を聞いた。

「話してくれませんか、リアン？」彼は、再び尋ねた。——そして、彼に向けられた、死のような、苦しみの浮かんだ顔を、彼は決して忘れることができなかった。

「お答えできません。」と彼女は答えた。彼女の声は消えかかり、彼は彼女が椅子からくずれ落ちたのかと思った。

「それが、あなたの最終決断ですか？あなたが受け入れた恋人である私に対して、私を知る権利があることがらについて、あなたは語ることを拒むのですか？」

「信じてください、ライオネル。」と彼女は哀願した。「あなたが私に捧げてくださった愛情にかけて。私を信じてください！」

「私は二度と再び、誰をも信じることがないでしょう。」と彼は言った。「あなたの約束を撤回してください、リリアン・アール。あなたは、誠実で正直な心を打ち砕き、一生を損ないました。あなたから離れて、私がどうなってしまうのかは神のみぞ知る、です。私は、自暴自棄です。あなたは私を裏切りました。指環をお返しします。お別れを申し上げます。あなたの、偽りに満ちた美しい顔を二度と見たくはありません。」

「ああ、ライオネル、待ってください！」と、彼女は叫んだ。「時間をください——そんなふうに、私から離れないでください。」

「時間が経つても、状況はさして変わらないでしょう。」と彼は答えた。「明日の朝まで、私はこの館にとどまります。もしあなたが私にこの館に居続けてほしいと願うのならば、そのように書いてきて

ください。」

彼は震えながら差し伸べられた手に気づかないふりをして、指輪をテーブルの上に置いた。彼は部屋を立ち去る時に、我慢できずに彼女の方を振り向いた。死のような苦しみに満ちたこの優しい顔と、青ざめて震える唇を、彼は目にした。そして彼は、彼女が苦悩に打ちひしがれようと、澄んだ美しい目元には何の罪も認められないと思った。

彼はドアから戻ってきて、アール卿のもとにまっすぐ向かった。

「明朝、私はアールズコートを去ります。」と彼はだしぬけに言った。「私は行かねばなりません、アール卿。どうぞ私をお引き留めにならないでください。」

「来るのも、行くのも構わないよ、ライオネル。」とロナルドは、彼のぶつきらぼうな調子に驚きながら言った。「我々はいつでも君に会うことを楽しみにしているし、君が去ることを残念に思う。すぐに戻ってくるのだろう、おそろくは？」

「数日以内に手紙を書きます。」と彼は言った。「私はレディー・アールにもお別れを申さねばなりません。」

彼女は仰天した。ベアトリスとエアリー卿は、驚きと残念そうな表情を浮かべて彼のもとに来了。彼は、普段の彼にも似ず、ぶつき

らぼうで、ほとんど高慢ともいえる態度をとった。

ハリ卿とレディ・ローレンスは帰って行った。ベアトリスは、何かの間違いが起きたのではないかとかすかな疑念を抱いていたが、疲れたと言った。エアリー卿はおやすみなさいを告げた。そしてほどなく、レディ・ヘレナとその息子は、二人だけ取り残された。

「ライオネルに何が起きたのでしょうか？」とロナルドは尋ねた。
「母上、私は大変な間違いを犯していたようです！彼がリリアンと恋に落ちていると私が考えていたことをご存知でしょうか？」

「かなり以前からそうでしたよ。」と、レディ・ヘレナは微笑みながら答えた。「それについては何も言わなくてよいのです。ライオネルはとても誇り高く、性急なところがあります。おそらく彼とリリアンはちよつとした諍いをしたのでしょう。こうしたことはそつとしておくのが一番です——おせっかいは、いつも良くありませんよ。彼は数日以内に戻ってきますよ。そして、全てが元通りになるでしょう。ロナルド。一つだけ、あなたに尋ねたいのです。——もしあなたを苦しめることになったとしても、怒らないでくださいね。ベアトリスはもうすぐ結婚するでしょう——あの子の結婚式に母親を呼びたいとは思いませんか？」

アール卿は椅子から立ち上がり、気がかりなことがある時にいつもそうするように、部屋の中を行ったり来たりし始めた。

「私は彼女の権利を忘れてしまいました。」と彼は言った。「どうすればよいか分からないのです、母上。彼女を無視することは、残酷で不当で無礼なことでしょう。ですが、私は彼女に会いたくはないのです。私の心には激しい葛藤がありますが、彼女に会う気にはなれないのです。」

「かつてはあんなにも愛していたのにですか？」とレディ・ヘレナは尋ねた。

「そうです。」と彼は静かに言った。「気の毒なドラ。」

「誰かに対して憎しみを抱きつつ生きることは辛いことですよ。」とレディ・ヘレナは言った——「ましてその相手が自分自身の妻ならば！私には理解できませんよ、ロナルド。」

「あなたは間違っています、母上。」と、彼は性急に言った。「私はドラを不当に扱っているわけではありません。彼女は私を不快にし——私の名誉を傷つけ——私が決して忘れることができないやり方で私に苦しみを与えたのです。」

「あなたは、いつかは彼女を許さねばなりません。」と、レディ・アールは応じた。「なぜそれが今ではないのですか？」

「できません。」と彼は悲しそうに言った。「私は自分をよく分っています——私には、自分にできることとできないことが分かっています。」

いるのです。私は妻を腕に抱き、彼女の顔にキスをすることはできませんでした——しかし彼女と暮らすことはできませんでした。私が人間的なものを全て失うことになった時に、私は彼女を許すでしょう。私は死の瞬間に彼女を許すでしょう。」

(以下、次号)

翻 訳

Charlotte M. Brame 著 『ドラ・ソーン (Dora Thorne) 』

(翻訳・その29)

堀 啓子

A Translation of *Dora Thorne* by Charlotte M. Brame ②9

HORI Keiko